



有家中だより No9

令和7年11月25日
南島原市立有家中学校
校長 本多 洋二

2学期も残り1か月余り！

早いもので2学期も残すところ1か月余りになりました。2学期も様々な行事を通して、生徒たちは成長しています。本号では、前号で紹介していない様々な行事について、お知らせします。

＜命の学習～赤ちゃんとの触れ合い～＞

去る10月29日・30日に3年生を対象に命の学習を実施しました。思春期における心身の特徴等や生命誕生について専門的に学ぶことで、命の尊さや自己肯定感を高め、自他を尊重して行動できるようになることを目的に実施しました。市役所の子ども未来課から、講師を招き開催しました。併せて、本物の赤ちゃんとそのお母さんにも来てもらい、実際に1歳未満の赤ちゃんとの触れ合い体験を行いました。生徒たちは、生命の尊さを実感していました。その後、子ども未来課の助産師さんの講義を聞きました。大変有意義な時間となりました。



＜赤ちゃんに触れ合う生徒たち。初体験です＞

12月の主な行事

- 1日（月） 生徒会役員選挙
- 2日（火） 進路委員会
- 5日（金） 学年学級PTA（1・2年のみ）
- 9日（火） 人権集会
- 10日（水） 避難訓練（地震対応）
- 19日（金） 生徒集会
- 23日（火） 生徒会役員任命式・引継ぎ式
大掃除
- 24日（水） 2学期終業式（給食あり）

＜見事！！西望賞受賞！＞

去る11月16日（日）北村西望賞教育美術展の表彰式が開催され、本校の2年生峰原舜さんが、立体部門で西望賞を受賞しました。出品数246点の中から見事選出されました。柿を紙粘土で作成していましたが、どこから見ても、本物と見間違えるほどの出来でした。

そして、古野賞科学技術展では、出品数118点の中から、優秀賞に選ばれたのは、2年生の田中愛美さんでした。有中生徒の活躍をうれしく思いました。



＜本物と同じ質感です＞



特選に輝いた藤原巧守さんの絵
「木から生えてきた草」

他に特選に輝いたのは、3年生の神崎優花さん、2年生の山田欄々さん、山口結大さん、1年生の松尾愛子さんです。

11月1日(土)、PTA 有志の方に除草剤を散布していただきました。ありがとうございました。



<有志の方々>

山田会長、
田中環境部長、
土橋輝治さん、
永石勝久さん
荒木卓さん
城川秀雄さん
大変助かりました。



<修学旅行に行ってきました。>

去る11月11日(火)～13日(木)の3日間、関西方面に修学旅行を実施しました。2年生58名全員が参加できたこと、途中で体調を崩す生徒もいましたが、全員がすべての体験や観光地の見学ができたことが一番の喜びでした。58名全員が、修学旅行を通して、時間を守ることや感謝の気持ちを言葉に表すことの大切さを感じることができ、成長を実感できた修学旅行でした。



ブレイクコーナー

人を喜ばせる体験は夢の実現へつながる！

自分の考えや人の受け売りです。気軽にお読みください。

1人の女の子の話を紹介したい。その女の子は、小学生の時、遠くの市から転校してきた。おとなしく、友だちも多くないまま中学校に入学した。ある日、同じクラスの男子生徒からの意地悪がきっかけで学校に行けなくなった。家から外に出られないその子に会いに家庭訪問する。「玄関の外に出るところを想像してごらん！」そう言うだけで過呼吸を起こしそうになった。

その子の特技はお菓子作り。家庭訪問のたびに手作りのお菓子でもてなしてくれた。彼女が好きな料理本と一緒に眺めながら、「きっとお菓子屋さんになれるよ」と何度も口にした。やがて彼女は勇気を出して夜の学校へやってきて、職員室にいる先生方へ手作りのお菓子を配ってくれた。食べた先生全員が「ありがとう！すごくおいしいよ！上手だね」と喜びながらほめてくれた。人に喜んでもらえるという体験は彼女を変えた。大きな勇気と小さな一歩を繰り返すうちに彼女は相談室まで登校できるようになった。相談室の先生やカウンセラーの先生方に手作りのお菓子を振る舞った。彼女は自分の居場所を見つけた。教室には戻ることができなかったものの修学旅行には行くことができた。中学校卒業後は高校に進学し、夢の実現のため専門学校に進んだ。数年後、結婚式の招待状が届いた。彼女は夢を叶え、パティシエになっていた。結婚式では祝辞を述べた。「中学生時代の彼女は、控えめでありながら本当に心優しい生徒でした。困っている人がいれば横で話を聞いてあげ、そっと励ましてあげる。彼女に励まされ、癒やされ元気をもらった生徒を私はたくさん知っています。本当にすばらしい思いやりにあふれる生徒でした。」中学時代に教室には入れなかったことを伏せたまま、お祝いの言葉を贈った。

しかし、彼女は最後の両親への挨拶でこう言った。「お母さん、中学校の時、学校にあんまりいけなかった私を支えてくれてありがとう」彼女の歩みは、そのまま私の誇りでもある。